

文士の生活

夏目漱石氏—収入—衣食住—娯楽—趣味—愛憎—日常生活—執筆の前後

夏目漱石

青空文庫

私が巨万の富を蓄えたとか、立派な家を建てたとか、土地家屋を売買して金を儲けて居るとか、種々な噂が世間にあるようだが、皆嘘だ。

巨万の富を蓄えたなら、第一こんな穢い家に入つて居はしない。土地家屋などはどんな手続きで買うものか、それさえ知らない。此家だつて自分の家では無い。借家である。月々家賃を払つて居るのである。世間の噂と云うものは無責任なものだと思ふ。

先ず私の収入から考えて貰いたい。私にどうして巨万の富の出来よう筈があるか——と云うと、ではあなたの収入は？と訊かれるかも知れぬが、定収入といつては朝日新聞から貰つて居る月給

である。月給がいくらか、それは私から云つて良いものやら悪いものやら、私にはわからぬ。聞きたければ社の方で聞いて貰いたい。それからあとの収入は著書だ。著書は十五六種あるが、皆印税になつて居る。すると又印税は何割だと云うだろうが、私のほかに外の人のより少し高いのだそうだ。これを云つて了つては本屋が困るかも知れぬ。一番売れたのは『吾輩は猫である』で、従来の菊判の本の外ほかに此頃縮刷したのが出来て居る。此の両方合せて三十五版、部数は初版が二千部で二版以下は大抵千部である。尤ももつと此三十五版と云うのは上巻で、中巻や下巻はもつと版数が少い。幾割の印税を取つた処が、著書で金を儲けて行くと云う事は知れたものである。

一体書物を書いて売るといふ事は、私は出来るならしたくないと思う。売るとなると、多少慾が出て来て、評判を良くしたいとか、人気を取りたいとか云う考えが知らず知らずに出て来る。品性が、それから書物の品位が、幾らか卑いやしくなり勝ちである。理想的に云えば、自費で出版して、同好者にただ只で頒わかつと一番良いのだが、私は貧乏だからそれが出来ぬ。

衣食住に対する執着は、私だつて無い事はない。いい着物を着て、美味うまい物を食べて、立派な家に住み度たいと思わぬ事は無いが、只ただそれが出来ぬから、こんな処で甘んじて居る。

美服は好きである。敢あえて流行を趁おう考も無いし、もう年を取つたからしやれても仕方が無いと思つて居るので、妻の御仕着せを

黙つて着て居るが、女などがいい着物を着たのを見ると、なるほど成程いいと思う。

食物は酒を飲む人のように淡泊な物は私には食えない。私は濃厚な物がいい。支那料理、西洋料理が結構である。日本料理などは食べたいとは思わぬ。もつと尤も此支那料理、西洋料理も或る食通と云う人のように、何屋の何で無くてはならぬと云う程に、味覚が發達しては居ない。幼穉ようちな味覚で、油っこい物を好くと云う丈だけである。酒は飲まぬ。日本酒一杯位は美味うまいと思うが、二三杯でもう飲めなくなる。

其の代り菓子は食う。これとても有れば食うと云う位で、態わざわ々ざ買つて食いたいと云う程では無い。煎茶せんちやも美味うまいと思つて

飲むが、自分で茶の湯を立てる事は知らぬ。莨たばこは吸つて居る。一事止した事もあつたが、莨を吸わぬ事が別に自慢にもならぬと思つたから、又吸い出した。余り吸つて舌が荒れたり胃が悪くなつたりすれば一寸ちよつと止すが、癒なほれば又吸う。常に家に居て吸つて居るのは朝日である。値段は幾らだか知らぬが、安いのであろうが、妻がこれ許ばかり買つて置くから、これを飲んで居る。外に出て買う時に限つて敷しきしま島を吸うのは、十銭銀貨一つほう投り出せば、釣つりせん銭せんが要いらずに便利だからである。朝日よりも美味うまいか如何どうか、私には解らぬ。

家に対する趣味は人並に持つて居る。此の間も麻布あざぶへ骨董屋こつとうやをひやかしに出掛けた歸りに、人の家をひやかして来た。一寸ちよつと

眼に附く家を軒のきいこと毎のぞに覗き込んで一々点数を付けて見た。私は家を建てる事が一生の目的でも何でも無いが、やがて金でも出来ぬなら、家を作つて見たいと思つて居る。併しかし近い将来に出来そうも無いから、如何どう云う家を作るか、別に設計をして見た事はない。此家は七間ばかりあるが、私は二間使つて居るし、子供が六人もあるから狭い。家賃は三十五円である。家主は外ほかとの釣合があるから四十円だと云つて呉くれと云つて居るが、別に嘘うそを云う事もないと思つて、人には正直に三十五円だと云つて居る。家主が怒るかも知れぬ。地坪は三百坪あるから、庭は狭い方では無い。然しかし植木は皆自分で入れたのだから、こんな庭の附いている家として、三十五円や四十円では借りられないだろう。植木屋と云う

ものは勝手なもので、一度手入れをさせたら、こつちで呼ばないのに、時々若い者を連れて仕事にやって来る。物の一月余りもこちこち其処辺そこらをいじつて居る事がある。別に断わるのも妙だと思つて、何とも云わずに居るが、中々金がかかる。

私はもつと明るい家が好きだ。もつと奇麗きれいな家にも住みたい。

私の書齋の壁は落ちてるし、天てん井じょうは雨洩りのシミがあつて、

随分穢きたないが、別に天井を見て行つて呉くれる人もないから、此儘このまま

にして置く。何しろ畳の無い板敷である。板の間から風が吹き込

んで冬などは堪たまらぬ。光線の工合ぐあいも悪い。此上すわに坐つて読んだり

書いたりするのは辛つらいが、気にし出すと切りが無いから、関かまわず

に置く。此間或る人が来て、天井を張る紙を上げましよう云つ

て呉れたが、御免を蒙った。別に私がこんな家が好きで、こんな暗い、穢きたない家に住んで居るのではない。余儀なくされて居るまでである。

娯楽と云うような物には別に要求もない。玉突は知らぬし、囲碁ごも将碁しょうぎも何も知らぬ。芝居は此頃何かの行掛り上から少し見た事は見たが、自然と頭の下るような心持で見られる芝居は一つも無かった。面白いとは勿論もちろん思わぬ。音楽も同様である。西洋音楽のいいのを聞いたら如何どうか知らぬが、私は今までそう云う西洋音楽を聞いた事の無い為せいか、未だ一度も良い書画を見る位の心持さえ起した事は無い。日本音楽などは尚なおさら更詰らぬものだと思う。只謡曲ただ文だけはやって居る。足掛六七年になるが、これも怠なまけ

て居るから、どれ程の上達もして居ない。下がかりの宝生で、先生は宝生新氏である。尤も私もつとは芸術のつもりでやって居るのではなく、半分運動のつもりで唸うなるまでの事である。

書画だけには多少の自信はある。敢て造詣あえぞうけいが深いというのでは無いが、いい書画を見た時許ばかりは、自然と頭が下るような心持がする。人に頼まれて書を書く事もあるが、自己流で、別に手習いをした事は無い。真ほんとの恥を書くのである。骨董こつとうも好きであるが所謂骨董いわゆるいじりではない。第一金が許さぬ。自分の懐都ふどころつご合うのいい物を集めるので、智識しつむは悉無である。どこの産だとか、時価はどの位だとか、そんな事は一切知らぬ。然し自分の気に入らぬ物なら、何万円の高価な物でも御免ごめんを蒙こうむる。

明窓浄机めいそうじようき。これが私の趣味であろう。閑適を愛するのである。

小さくなつて懐ふところ手てして暮したい。明るいのが良い。暖かいのが良い。

性質は神経過敏の方である。物事に対して激しく感動するので困る。そうかと思うと、又神経遅鈍な処もある。意志が強くて押える力のある為めと云うのでは無かろう。全く神経の感じの鈍い処どこが何処どこかにあるらしい。

物事に対する愛憎あいぞうは多い方である。手廻りの道具でも気に入つたの、嫌きらいなのが多いし、人でも言葉つき、態度、仕事の遣やり口くちなどで好きな人と嫌いな人がある。どんなのが好きで、どんな

のが嫌いかと云う事は、何れ又記す機会があるうと思ふ。

朝は七時過ぎ起床。夜は十一時前後に寝るのが普通である。昼食後一時間位、うたたね転寝をする事があるが、これをするぐあいと頭の工合の大変よいように思ふ。でぶしょう出不精の方で余り出掛けぬが、時々散歩はする。俗用で外出をや已むなくされる事も、偶には無いではない。人を訪問に出る事はあるが、年始とか盆とかの廻礼などは絶対にしない。又する必要はないと考へて居る。

執筆する時間は別にきまりが無い。朝の事もあるし、午後や晩の事もある。新聞の小説は毎日一回ずつ書く。書き溜めて置くと、どうもよく出来ぬ。やはり矢張一日一回で筆を止めて、後は明日まで頭を休めて置いた方が、よく出来そうに思ふ。一気呵成いっきかせいと云うよう

な書方はしない。一回書くのに大抵三四時間もかかる。然し時に依ると、朝から夜までかかつて、それでも一回の出来上らぬ事もある。時間が十分にあると思うと、矢張長時間かかる。午前中きり時間が無いと思つてかかる時には、又其の切り詰めた時間で出来る。

障子しょうじに日影の射した処で書くのが一番いいが、此家ではそんな事が出来ぬから、時に日の当る縁側えんがわに机を持ち出して、頭から日光を浴びながら筆を取る事もある。余り暑くなると、麦藁むぎわら帽子ぼうしを被かぶつて書くような事もある。こうして書くと、よく出来るようである。凡すべて明るい処がよい。

原稿紙は十九字詰十行の洋罫紙ようけいしで、輪廓りんかくは橋口五葉君に画

いて貰ったのを春陽堂に頼んで刷らせて居る。十九字詰にしたのは、此原稿紙を拵こしらえた時に、新聞が十九字詰であったからである。用筆は最初Gの金ペンを用いた。五六年も用いたろう。其後万年筆にした。今用いて居る万年筆は二代目のでオノトである。別にこれがいいと思つて使つて居るのも何でも無い。丸善の内田魯庵君に貰つたから、使つて居るまでである。筆で原稿を書いた事は、未だま一度もない。

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」筑摩書房

1972（昭和47）年1月10日第1刷発行

初出：「大阪朝日新聞」

1914（大正3）年3月22日

※底本は、「談話」の項におさめた本作品の表題に、かぎ括弧を付けて示している。

入力：Nana ohbe

校正：米田進

2002年4月27日作成

2003年5月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文士の生活

夏目漱石氏－収入－衣食住－娯楽－趣味－愛憎－日常生活－執筆の前後

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 夏目漱石
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>